宗門総合振興計画　vol.41

「宗門寺院と戦争・平和問題」調査報告（その８）
――空襲・原爆等の寺院被害２――

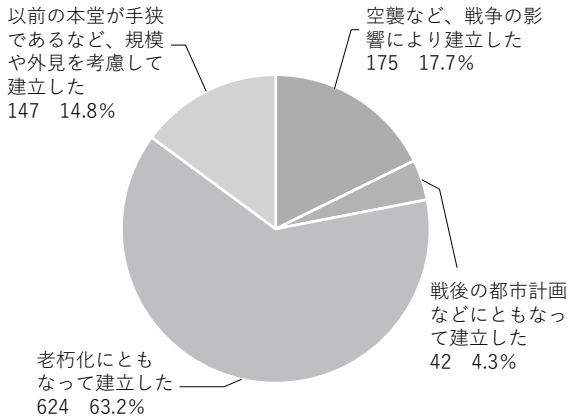
新田光子（戦時被災等調査委員会委員「戦時調査室」調査担当）
渡辺慶子（「戦時調査室」調査研究員）

「宗門寺院と戦争・平和問題」調査につきまして、宗報前号「５月号」では、「空襲・原爆等の寺院被害」をテーマにご報告いたしました。今号はその続きです。

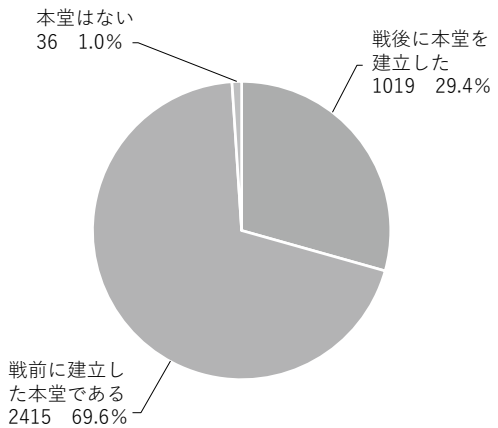
１、戦後の本堂の建立について

昨年度実施させていただきました郵送調査では、戦後の時代（昭和20年以降）について、（問37）「寺院活動の中心である本堂について、教えてください」との問いかけに、ご回答いただきました。「図表１」は、全回答数３４７０の回答内訳を示したものです。

この選択肢回答のうち、「戦後に本堂を建立した」というご回答には、続けて「本堂建立の主な経緯・状況について」お尋ねしました。そのご回答を示したものが、「図表２」です。「空襲など、戦争の影響により建立した」という回答は、175か寺、戦後本堂を建立した寺院全体（「不明」31ケースを除く988ケース）の17・



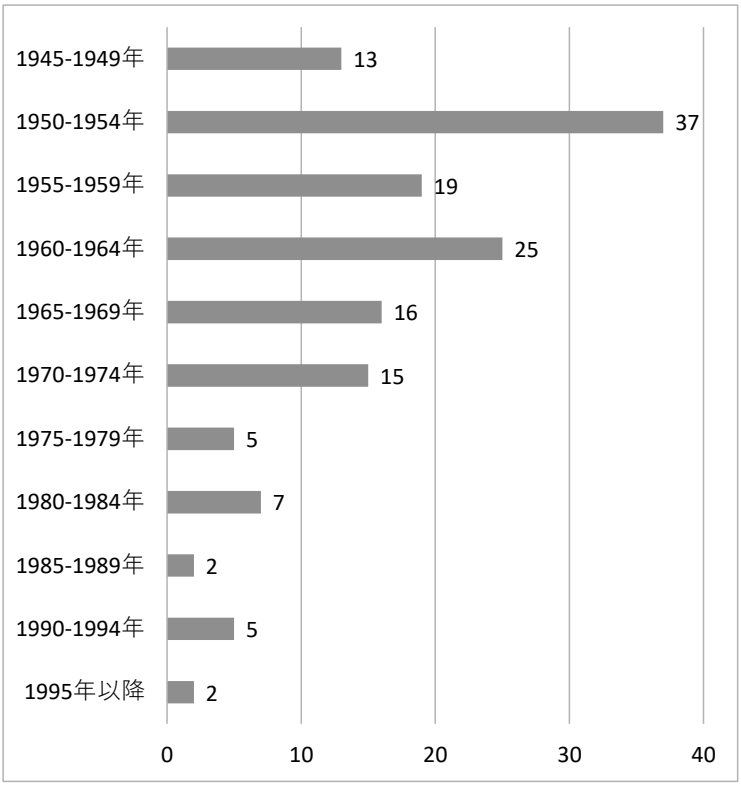
図表２　本堂を建立した経緯・状況



図表１　本堂建立について

7％を占める割合でした。

「空襲など、戦争の影響により建立した」本堂については、建設時期についても教えていただきました。「図表3」は、建設時期別の回答内訳です（「不明」29ケースを除く146ケース）。



図表３　本堂が空襲・原爆被害を受け、戦後再建した時期

2、広島の原爆被害寺院

原爆が投下される前、広島市には仏教寺院が148か寺あり、そのうち真宗寺院が78か寺ありました。被爆寺院は、市内、近郊、真宗、他宗派、多くの寺院にのぼりました。[注1]

「広島の原爆被害」について、ここでは、安芸教区広陵東組・広陵西組の回答を参照させていただきます。調査票の各設問では、「被害状況」「住職世帯被害」「門徒被害」ならびに「被害の影響」について伺いましたので、そうした回答にもとづく被害状況は、「図表4」のとおりです。「広島の原爆被害」の概要を示しています。

3、原爆被害寺院の事例

このたびの戦時調査では、写真・記録資料を募集しております。本稿のテーマに関連して既にご提供いただきました本堂をはじめ寺院建物被害に関わる写真等資料を、いくつか取り上げさせていただきます。

(1)實相寺「図表4―寺院⑱」

實相寺（住職・相正信師）は、広島市中心部「寺町」に位置しています。広島に投下された原爆で、爆心地「寺町」で

図表４　原爆被害状況についての記述回答（安芸教区広陵東組・広陵西組の寺院21ケース）

寺院	被害状況	住職世帯被害	門徒被害	本堂建立	被害の影響
①	境内建物全焼。	前住職（当時14歳）が負傷、中程度の原爆症。	死者多数。１９４５年８月６日～年末の間約１０００人の死没者が過去帳に記載されているが、覚え書にはそれ以上の人数が記されている。	１９５２年	原爆による人的・物質的な被害に加えて、戦災復興都市計画の道路計画によって境内地が半減した。
②	本堂半壊、庫裏全壊、その他尽大な被害。	当時の住職の次男が被爆死。	死者多数。多数の原爆症患者。	（無記入）	寺院における活動停止。当時の住職が、市中央部から避難して死亡した人に法名を付け葬儀をしたと聞いた（延べ２０００人）。
③	全壊。	寺族が被爆。	死者多数。	１９６７年	（無記入）
④	本堂・庫裏全焼、全壊。	住職が死亡。		１９５３年	住職の死亡により、後継者成人までの間、無住状態が続いた。
⑤	全焼。	自坊内にいた当時の坊守が死亡。	中心部のご門徒の多くが亡くなられたとのこと。	１９９４年	寺院が全焼したため、郊外の説教所に無事だった当時の住職、疎開していた子弟が移り住んだ。焼け残った墓石は田舎のご門徒がリヤカーで運んでくださったと聞いた。
⑥	本堂と庫裏が倒壊・焼失。	（無記入）	死傷者多数。	１９６９年頃	このような状況でとても寺院活動のできる状態ではなかったと聞いた。
⑦	全壊。	当時の住職と坊守が死亡。	門徒は広島市内に在住のため、人的被害は大きかった。	１９５２年	平和公園内にあったため移転。また、門徒の消息も不明の時が長く続いたが、原爆33回忌の頃（１９７７年）には明らかになってきた。
⑧	全焼。	住職は出征中。坊守は当日は疎開先にいて、入市被爆。	２００人あまり。	１９４７年仮本堂、１９８４年再建	原爆後開設した保育園は、園舎の老朽化で１９７２年に閉園した。本堂再建は門徒の懇志とともに墓地増設収入を充てた。
⑨	全焼。	第13世の坊守などが被爆死。	多数（詳細不明）。	１９６１年、１９９９年再建	戦後数年活動できなかったと聞いた。
⑩	本堂は半壊、庫裏は全壊。	住職が死亡。	死者多数。	（無記入）	本堂を１９４７年頃に修復するまでは、活動はできなかった。

寺院	被害状況	住職世帯被害	門徒被害	本堂建立	被害の影響
⑪	庫裏半壊。	住職が死亡。	死者多数。	1965年	戦前に坊守は死亡。2人の女子（小学生、女学生）のみ残された。
⑫	全焼。	住職の次男が死亡（住職は当時札幌別院に勤務）。坊守、2人の子が重傷。	多すぎてわからない。	1983年	御本尊、その他大切なものはあったがすべてなくなった。
⑬	全壊。	被爆。	被爆。	1952年	寺院活動はできなかった。
⑭	本堂（本坊・支坊）寺院一切建物全焼。	坊守が死亡。	死者多数。	1948年	終戦後、2年間活動不能。
⑮	全焼。	住職が死亡。	過去帳に、800人以上（実数不明）。	1973年	（無記入）
⑯	本堂・会館庫裏すべて、爆風で倒壊。	住職が被爆1か月後に原爆症で死亡。住職三男が本堂の下敷きになり死亡。住職三女が被爆1か月後に原爆症で死亡。住職次男が学校教育として生徒の勤労奉仕引率中に被爆し、似島に運ばれ死亡。	一家全滅した家もあり、子どもだけ残され親戚をたらい回しにされたケースもある。また、原爆症で長く苦しみ人生が狂ってしまった方々。被害状況は種々。	1994年	被爆直後から、倒壊した本堂の屋根を目指して、門徒の人々が亡くなった家族の葬儀の依頼に来ていた。住職も原爆症の症状が出るなか、葬儀を行っていたそうだが、1か月で亡くなった。その2年後に満州より引き揚げてきた長男の後継住職も、あまりの惨状に2年ばかり、何もできなかったと聞いた。
⑰	全壊。	重傷2人、行方不明1人、軽傷2人（全員被爆）。	死者多数（わかっているだけで350人以上）。負傷者多数。	「仮本堂」1947年、「正本堂」1975年	活動ができなくなった。
⑱	全焼、全壊。	行方不明、建物下敷き、原爆症。	「不明」。	1954年、1998年	門信徒の行方を調べることが大変だったと聞いた。
⑲	全焼失。	前住職は、広島別院で被爆。	死者多数。	1975年	前住職からは、口で言えるようなものではないと話はなかった。
⑳	全壊・焼失。	住職及び住職妻・子供1人死亡。	「不明」。	1947年	当分の間無住職　代務住職をたてた。
㉑	（無記入）	当時の住職死亡。	亡くなった人がいると思われる。	1947年頃	本堂の焼失・住職の死亡等により住職不在の時期があったように聞いた。

資料1　戦後早くに建てられた本堂（左）、その後再建された現本堂（右）（實相寺提供）

は広島別院はじめ宗門寺院12か寺が倒壊・焼失しました。

實相寺の本堂は１９４３（昭和18）年に建立されました。その直後に原爆で焼失しますが、本堂の再建は寺町では實相寺がいち早く、１９５３（昭和28）年11月に再建工事着工、１９５４（昭和29）年２月に工事が完成しました。この本堂はさらに建て替えられ、現本堂は１９９８（平成10）年に完成しました。

(2)報専坊「図表４―⑯」

報専坊（住職・冨樫恵生師）は寺町では最も遅く、１９９４（平成６）年に本堂が再建されました。本堂正面階段はくりぬいて、被爆したイチョウが大切に保存されました。

このイチョウは「広島市被爆樹木マップ」に掲載されています。海外からの旅行者、修学旅行の小・中学生、あるいは平和学習のために地域の小学生などが見学に訪れています。

資料２　本堂と本堂正面のイチョウ（報専坊提供）

(3)本願寺広島別院

広島別院は原爆投下地点から1kmあまりの位置にあり、本堂をはじめ堂宇すべてが倒壊、焼失し、槇藤哲蔵輪番含め5人の職員・参拝者が即死しました。[注2]

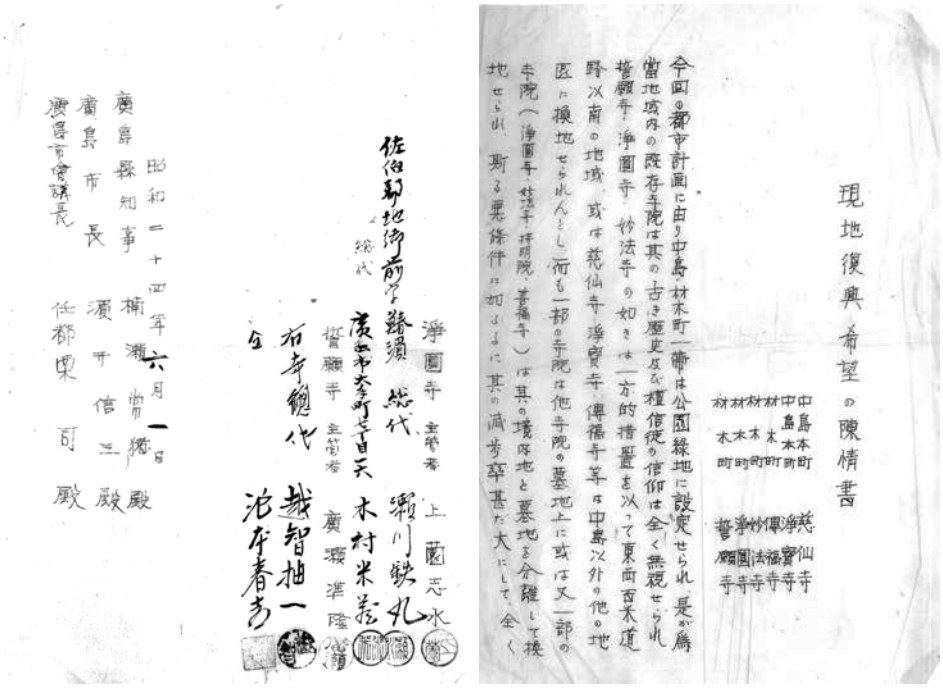
1946（昭和21）年5月には仮本堂が完成し、1964（昭和39）年には本堂を再建することができ、「安芸門徒」の復興の歩みを中心となってすすめてきました。

資料3　原爆で焼失した広島別院旧本堂（『非戦・平和を願って70年 本願寺広島別院 戦後復興記録誌』本願寺広島別院、2016年より）

(4)浄圓寺「図表4―⑦」

浄圓寺（住職・上園恵水師）は原爆投下地点に近い「材木町」に位置し、1946（昭和21）年には同地で寺院活動を再開しました。まもなく「平和公園」建設予定地となり移転を余儀なくされましたので、1949（昭和24）年6月、県知事・市長宛てに「現地復興希望の陳情書」（資料4）を提出しましたが認められませんでした。

換地での本堂建設は、寄付を募る際に次第に門徒の消息が明らかになり、1952（昭和27）年6月に完成しました。現在の本堂は、その後さらに建て替えられたものです。



現地復興希望の陳情書

中島本町 材木町 材木町 材木町 材木町

慈仙寺 浄寶寺 浄福寺 浄圓寺 浄妙寺 願法寺 願專寺

今回の都市計画に由り中島材木町一帯は公園緑地に設定せられ、是が爲當地域内の既存寺院は其の古き歴史及び檀信徒の信仰は全く無視せられ願專寺、浄圓寺、妙法寺の如きは一方的措置を以て東西西本道野火南の地域、或は慈仙寺、浄寶寺、傳福寺等は中島以外の他の地区に換地せられんとし、而も一部の寺院は他寺院の墓地上に或は又一部の寺院（浄圓寺、妙法寺、願明院、善福寺）は其の境内地と墓地を分離して換地せられ、斯る悪條件に加うるに其の減歩率甚だ大にして、全く

浄圓寺　主管者　上園志水

佐伯郡地御前村　総代　瀬川敬九

廣島市大字町字白天　総代　木村米義

願專寺　主管者　廣瀬準隆

妙寺　総代　越智柚一

法寺　総代　沼本春吉

昭和二十四年六月一日

廣島縣知事　横瀬粂吉　殿

廣島市長　須井信三　殿

廣島市會議長　任都栗可　殿

資料4　「現地復興希望の陳情書」（一部抜粋）（浄圓寺提供）

(5)浄光寺「図表4―⑥」

浄光寺（住職・中川

資料５　原爆投下前の浄光寺本堂（左）と被爆後修復された現在の山門（右）（浄光寺提供）

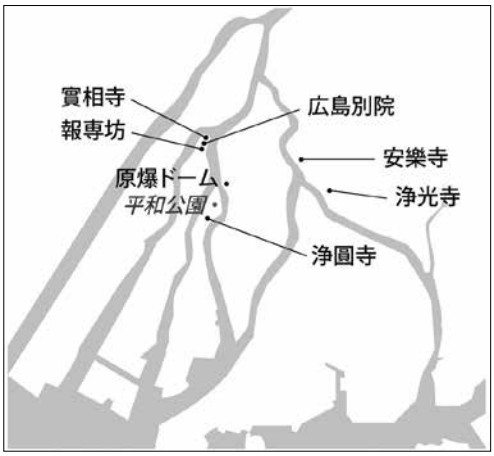
英尚師）は、爆心地からの距離が２kmあまり、ＪＲ広島駅近くに位置しています。原爆により本堂、庫裏は倒壊・焼失しました。その後、仮本堂を建立し、現本堂は１９６９（昭和44）年に建てられました。

原爆での倒壊を免れた山門は１９９６（平成８）年、「広島市被爆建物保存継承事業」の一環で修復、保存工事をされ、今に至っています。

⑹安樂寺「図表４―②」

安樂寺（住職・登世岡浩雄師）の１７８８（天明８）年に建てられた本堂は、原爆により柱が残っただけでした。１９４８（昭和23）年に仮修理をほどこして、１９７４（昭和49）年に屋根などの大規模修理がおこなわれたのが、現在の本堂です。

本堂を原爆の火災から守った「安樂寺の大イチョウ」の由来や被爆については、安樂寺前住職、登世岡浩治師が自らの被爆体験とともに語り伝えています。



本稿事例寺院の分布

注１　新田光子『原爆と寺院』法蔵館、２００４年参照。

注２　広島別院など真宗寺院の被爆状況が詳しい『広島原爆戦災誌』広島市役所、１９７１年、水原史雄『安芸門徒』中国新聞社、１９８０年、『ヒロシマの被爆建造物は語る』広島平和記念資料館、１９９６年など参照。

資料６　原爆投下前の安樂寺本堂（左・昭和10年代に同寺院作成の絵葉書より）とイチョウの木・本堂（奥）（安樂寺提供）

戦時調査室では、引き続き寺院の戦争に関わる記録資料を蒐集しております。記録資料とは、具体的には寺院の戦争被害前の写真・被害後の写真、公式の被災記録・証明書、新聞記事、県市町村史記事などです。

調査は「戦争と平和の問題」という視点から各寺院の歴史的事実を記録にとどめることを目的にしております。次号『宗報７月号』では、引き続き「空襲・原爆等の寺院被害」についてご報告いたします。

この調査をとりまとめた「宗門寺院と戦争・平和展」（仮称）は、今年度２０２１年11月20日から太平洋戦争開戦80周年の12月８日まで開催を予定しております。ご理解、ご協力をお願いいたします。

資料のご提供先・お問い合わせ先

【戦時調査室】
開室時間：火・水・木 10時～12時、13時～16時（宗務所休日は除く）
〒600-8349
京都市下京区堺町92
浄土真宗本願寺派総合研究所内
「戦時調査室」
Tel/075-354-5087
Fax/075-354-5360
Mail/senji-chousa@hongwanji.or.jp

新田光子（戦時被災等調査委員会委員）
渡辺慶子（調査研究員）
牛島悠紀（調査研究員）